

## 川とともに生きる (2)

自動車や鉄道のない時代に重くてかさ張る木材を運搬する手段として川が利用されました。木曾や飛驒の山で伐採された用材は一本ずつ流れにまかせて流され、途中、錦織（八百津町）と下麻生（川辺町）の綱場で筏いかだに組まれ、名古屋、桑名などそれぞれの目的地へ運ばれました。筏は目的地まで筏乗りによって何回も中継され、市域では川合、太田（波の上）、深田の多くの人たちがそれにたずさわり、川合のホーロク（宝六）で下麻生からきた筏に乗り、鵜沼まで下ることが多かったようです。左の写真はかつての筏乗り、



渡辺唯夫さん（川合町）が所蔵していたもので、今渡ダムの建設の始まった昭和十一年頃川合で撮影されたものです。筏自体を激流の下に半ば沈めながら必死に梶をとる筏乗りの様子がかげえます。

筏流しは、秋から春の彼岸まで、水量が少なく安定した時期に行われましたが、太田・鵜沼間にはサギの瀬、猿座、可児合など難所が多く、特に可児合は、流れが急な上にカーブが多く遭難の多い場所で、明治時代には乗り手七人が一度に死亡するという痛ましい事故もありました。最盛期には下麻生綱場だけで一日二百台を数えた筏流しも昭和初期のダム建設によりその努力を終えました。

今回、次の方々から貴重な資料を市教育委員会に寄贈いただきました。ありがとうございます。 (平成三年三月分)

## ○筏用トビグチ（鳶口）

（渡辺輝二さん／川合町）

## ○昭和初期の晴れ着 ほか二点

（井戸正二さん／田島町）

## ○古書三点

（神谷久之さん／伊深町）

情報は、市社会教育課（内線三六一）までお寄せください。